

## 参考資料1

表1 大橋家文書に名前が見られる倉敷代官の手附・手代たち

氏名	仕えた倉敷代官	倉敷代官在任期間	役職
内田弾助	大原四郎右衛門信好	文化6～文政元	手附
下又平	大草太郎右馬政郷	文政元年～文政12	手代
宇佐美律右衛門	古橋新左衛門忠良	天保元～天保7	手附(元締)
逸見八介			手附(公事方)
田中宗吾			手代
宇佐美郷一			手代
広田清吉	藤方彦市郎忠列	天保13～嘉永3	手附(元締)
小磯錠助			手代
野中修平			手代
松井孝三郎			手代
青木新左エ門	佐々井半十郎	嘉永3～安政5	手附(元締)
下又平			手附(元締)
野中修平			手代
杉浦武助	田中庄次郎時楸	安政5～6年	手附(元締)
高橋勇蔵			手附(公事方)
池田泰蔵	大竹左馬太郎勝昌	万延元～元治元	手附(元締)
小磯錠助			手附(元締)
長谷川仙介			手附
関口謙之進			手附(元締)
田中東蔵	桜井久之助知寿	元治元年～慶応3	手附(元締)
逸見小十郎			手附(公事方)
長谷川仙介			手附

註1 内田弾助のみ小野家文書140-1-1・水沢家文書2-13による

註2 大橋家文書 XIX-16-A-2、別2-7-9、別3-3-34、別4-13-34-1、別6-10-6-9・11・14、別7-8-38、別7-10-19、『倉敷市史』第四冊・五冊、

「古橋殿一件ニ付出府書類再江戸三蔵代人ニ付遣候書類とも入」(未整理)

西沢淳男『江戸幕府代官履歴辞典』、村上直・荒川秀俊編『県令集覧』

村上直「江戸幕府代官の遺跡に関する研究」『駒沢女子短期大学研究紀要』第4号などを基に作成

註3 ここに取り上げた手附・手代は一部であり文書にはこの表以外の名前もみられる

表2 内田清次郎略年譜 (年齢は数え年)

年	歳	事跡
寛政6	1794	1 誕生
天保9	1838	45 五郎右衛門から清介と改名。御料所手代見習いに出役
天保10	1839	46 関東代官・林金五郎政幸の江戸詰め手代となる
天保13	1842	49 ※1 葦山代官・江川太郎左衛門英龍の江戸詰め手代となる
天保14	1843	50 4月日光御参詣御用取人を仰せつかり関東代官・大熊善太郎喜住御手へ出役する この年より浪々の身となる
弘化元	1844	51 倉敷村に逗留
弘化2	1845	52 京都・大坂にでかけ京都の大原吞舟宅に滞在。当時伊勢にいた吞舟を訪ねる
弘化3	1846	55 正月15日の火事で湯島三組町の家が類焼。辰巳坂(ごみ坂)に仮住まいする
		天神下手城町の中泉代官・山上藤一郎定保役所詰めとなり同所に仮住まいする
		3月 江川の貰い受けになる。ただし肩書のみ
		5月 困窮し大橋正直に十両の借金を願い出る
		7月 宇佐美郷一の厚情により※2 飛騨郡代・小野朝右衛門高福の江戸詰め手代となる 評定所留役を務めた小田切庄三郎地面を借りて住まう
嘉永2	1849	58 小野朝右衛門高福拝領屋敷に引っ越す
嘉永3	1850	59 倉敷に赴任する佐々井半十郎代官に倉敷村の世情などを話す
嘉永4	1851	60 御城向ならびに勘定所出役を免じらる
		2月 伝奏御用取人となり伝奏屋敷へ引っ越す
嘉永7	1854	61 ※3 石見大森代官・屋代増之介忠良の江戸詰め手代となる
安政2	1855	62 下田奉支配組頭・松村忠四郎長為の手代となる
安政5	1858	65 大坂代官・屋代増之介忠良の江戸詰め役人となる
安政5	1858	65
文久元	1861	68 ※4 淀川過所船支配兼代官・角倉与一玄寧の京都詰め手代となる
文久3	1863	70
明治14	1881	88 本所相生町三丁目二十六番地に在住。歌人として人名録に名前が記載される
明治17	1884	91 死去

註 大橋家文書別2-7-4、別3-3-36-1、別4-7-16-3、別4-11-29、別5-7-3、東大橋家文書40-295-1、『大田区史』資料編加藤家文書2、鈴木平九郎『公私日記』、村上直・荒川秀俊編『県令集覧』、『名家伝記資料集正』第一巻、竹原得良編『現今東京文雅人名録』等より作成

※1 江川英龍 享和元～安政2年(1801～1855)。伊豆葦山の世襲代官の家に生まれる。海防に意を用い、鉄製砲鑄造のための反射炉(世界遺産・葦山反射炉)の建設に着手したことで有名。旧例にとらわれず人材を登用し民政に努め「世直し大明神」と称された。九淵・坦庵と号し書画詩文の分野にも長じ多くの作品を遺している

※2 小野高福 安永3～嘉永5(1774～1852)。弘化2年江戸御蔵奉行から飛騨郡代に転じた。外国との緊迫した情勢を懸念し狼煙の実演や陣立てを実施。また丙午出生児の迷信を打破するよう諭し、形式的な宗門人別帳を実際的にするよう指導した。山岡鉄舟の父であり、墓碑は「山岡鉄舟父母の墓」として昭和30年に高山市指定文化財(史蹟)となった

※3 屋代忠良 文化4～?(1807～?)。石見大森代官、大坂代官、西国筋郡代、美濃郡代などを歴任。大森では備中の医師たちを招き鉦山病予防に取り組んでいる。雅号を柳漁といい好んで左手で和歌を書いた

※4 角倉玄寧 寛政12年～明治6年(1800～1873)。本姓吉岡。京都の豪商角倉了以11代の後裔。京都代官や淀川過所船支配を務める。陶器に通じ嵯峨に窯を持ち、作品はその号から一方堂焼と呼ばれる。長男・玄室は茶道裏千家の養子となり12代家元となった

註 村上直・和泉清司・佐藤孝之・西沢淳男編『徳川幕府全代官人名辞典』、西沢淳男編『江戸幕府代官履歴辞典』講談社『日本人名大辞典』、朝日新聞社編『日本歴史人物事典』、「高山市の文化財」(高山市ホームページ)、『笠岡市史』第二巻「思文閣美術人名辞典」等より作成

表3 内田清次郎の書状に名前が見える文化人たち

名前	生没年	略歴
小堀宗中	1786～1867	茶道遠州流第八世。近江の生まれ。文政11年幕臣として召し出され小堀家を再興。能書家としても知られる
松村景文	1843～1779	画家。四条派の画家・松村呉春の異母弟。兄に学んで花鳥画を得意とし四条派の隆盛をもたらした
柴田義堇	1780～1819	画家。備前国邑久郡尻海村の豪商の家に生まれる。上京して松村呉春の門に入り岡本豊彦、松村景文らとともに高弟の一人に数えられる
大原呑舟	?～1858	津軽出身の画家。山水花鳥を得意とした大原呑響の子。画法を柴田義堇に学ぶ
古市金峨	1805～1880	画家。児島郡尾原村生まれ。京都の岡本豊彦に学ぶ。
野田笛甫	1799～1858	漢学者。丹後田辺藩士の子として生まれる。江戸へ出て古賀精里、古賀とう庵に学び帰郷して田辺藩儒となる
仁科白谷	1791～1845	儒者・漢詩人。備前邑久郡虫明村に生まれる。亀田鵬斎、猪飼敬所に学ぶ。鵬斎の子綾頼とも親しかった。その高風英才は天下に知られ老中水野忠邦に召しだされたが固辞したという。大橋正直の師でもある
的場天籟	生没年不詳	医師・書家。都宇郡早島村の医師・歌人の的場復斎の養子。京に上り室町に住して香川景樹に歌を学んだ
高橋波藍	生没年不詳	松前藩士。画家蠣崎波響の弟子。
椿椿山	1801～1854	南画家。江戸生まれ。幕府の鎗組同心で武術にも通じていた。谷文晁の門人・金子金陵に学び後渡辺崋山に師事した。代官江川英龍の画の師
中林竹洞	1776～1853	近世後期を代表する文人画家。尾張名古屋の医師の子に生まれる。頼山陽・貫名海屋らと交遊。画論・歌論・国家論などの著書がある
岡田半江	1782～1846	南画家。岡田米山人の子。大坂における文人画家の中心的存在であった
羽倉外記	1790～1862	幕府代官・儒学者。号は簡堂。大坂生まれ。天保13年水野忠邦の抜擢で勘定吟味役に昇格するが水野の失脚により職を失い弟に家督を譲って隠居した。『海防私策』を著し国防を論じる
貫名海屋	1778～1863	儒者・書家・画家。阿波藩士の子として生まれる。市川米庵・巻菱湖とともに幕末の三筆と称される
梁川星巖	1789～1858	漢詩人。美濃国安八郡曾根村の郷士の子に生まれる。藤田東湖・佐久間象山らと交わり時事への関心を高め後に尊王攘夷を主唱した。五千首に及ぶ詩を遺し評価は頼山陽よりも高い
大田垣蓮月	1791～1875	歌人。伊賀上野城代家老の庶子として生まれる。美貌と歌才で幕末の文人にもてはやされた。蓮月焼と称された自作の陶器も評判であった
梅辻春樵	1776～1857	漢詩人。日枝神社の禰宜を務める家に生まれる。漢学を皆川淇園、村瀬栲亭に学ぶ。絢爛な詩風の詩人として名高かった

表4 大橋平右衛門の格式免許一覧

年代	格式免許	理由
天保12年	永々苗字名乗	飢饉対策に金1000両分の粃上納
弘化4年	一代帯刀	讃岐国塩浜新開5500両差出、窮民救済、銀24貫目上納
安政2年	俸代まで帯刀 一代二人扶持	御備筋に金1000両、銃1000貫目
安政5年	一代四人扶持	海岸御備筋に金1000両
文久元年	永々帯刀	難渋者に金200両、本丸普請に1000両
慶応2年 5月	一代七人扶持 孫代まで屋敷地免除	御進発に金1300両
慶応2年 12月	熨斗目継上下 永代十人扶持・ 居屋敷免除	京都御用途に2000両

註 山本太郎『近世幕府領支配と地域社会構造』335頁の表より転載